



Title	ヘミングウェイ雑考
Author(s)	嶋田, 昇平
Citation	大阪外大英米研究. 1959, 1, p. 24-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヘミングウェイ 雑考

嶋 田 昇 平

ヘミングウェイは動物である。野獣である。猛獣である。そしてライオンである。

動物は本能によって行動する。その本能とは種族保存の本能であり、自己保存から出発した斗争本能である。

本能による行動は直線的である。「直線的」は simple に通ずる。

従ってヘミングウェイの文にそういった意味の simplicity が現われない訳はない。

I looked in her eyes and put my arm around her as I had before and kissed her. I kissed her hand and held her tight and tried to open her lips; they were closed tight. I was still angry and as I held her suddenly she shivered. I held her close against me and could feel her heart beating and her lips opened and her head went back against my head and then she was crying on my shoulder.

(A Farewell to Arms Ch. V)

上文は simplicity の具現に外ならない。人間の本能が最も率直な形であられるこのような描写に於いて、彼の筆は一段の冴えを見せる。構文もいささかの難渋さを留めず、用語も極めて simple である。80語より成るこの文中、three syllables の語がわずか1, two syllables の語が11, 他はすべて monosyllable の語である。これら simple な語を用いながらしかも必要にして充分な表現効果をあげている。勿論これも彼が文の彫琢に腐心した結果とはいえ、彼自身の中にこのような文を書かせる内なるものの存在がなければ、所詮「木に縁って魚を求める」結果となっていたのであろう。しかも、人間の最も動物的な面の描写においてすら、芸術的な高さを保っているのは、最も自然に偽りなく対象

をとらえる非情の目と彫琢の所産である。上文に於いて、削除し得る如何なる1語があろうか。代入し得る如何なる1語があろうか。

彼は対象に体でぶつかる。対象を頭で理解するのではなく、体で、感覚で理解する。従って、感覚でとらえ得るもの、具体的に存在するもの、それが彼の世界である。動物の世界もまたこれと同様である。動物の五感がとらえたもの、それが動物の世界である。このような動物的な対象把握は当然ヘミングウェイのそれであり、それが表現を得て彼の文となる。

One leg was gone and the other was held by tendons and part of the trousers and the stump twitched and jerked as though it were not connected. He bit his arm and moaned,...

(A Farewell to Arms Ch. IX)

先ず、One leg was gone の迫真に驚嘆する。これは動物ヘミングウェイの目がとらえた実体である。elaborate な表現をもってしても到達し得ざる elaborative effect を發揮している。すっとんでなくなった片脚、臍とズボンの一部でやっとくっついている片一方の脚、そういった痛ましい場面を何等感情をまじえないヘミングウェイの目が追っている。凄絶の中にそれを無縁と見る動物の目である。

動物が、欲求不満の状態におかれた時、危機をはらむ不安な状態におかれた時、しかも人間のように思考によってその解決の術を知らない動物は、のたうちまわったり、咆えたり、哭いたり、というような単純な反応をくりかえすのみである。ヘミングウェイが描く人物も、動物の行動に認められるような実に単純な反応を示すのは、やはりヘミングウェイその人の動物性に起因する。そしてそれが当然彼の文にあらわれる。

‘You mustn’t,’ she said. ‘You’re not well enough.’

‘Yes come on.’

‘No. You’re not strong enough.’

‘Yes I am. Yes. Please.’

‘You do love me?’

‘I really love you. I’m crazy about you. Come on, please.’

‘Feel our hearts beating?’

‘I don’t care about our hearts. I want you. I’m mad about you.’

‘You really love me?’

‘Don’t keep on saying that. Come on. Please, please, Catherine.’

‘All right, but only for a minute.’

‘All right,’ I said. ‘Shut the door.’

‘You can’t. You shouldn’t —’

‘Come on. Don’t talk. Please come on.’

(A Farewell to Arms Ch. XIV)

‘Come on’ のくりかえしは、雌を求める雄の吠え声を連想させる。また、このようなくりかえしは、彼の文にある種のリズムを与える結果になっている。このリズムは、動物的な本能のリズムであり、ヘミングウェイの内なるものが躍動するリズムである。

同様な実例を今一つあげると、

And what if she should die? She won’t die. People don’t die in childbirth nowadays. That was what all husbands thought. Yes, but what if she should die? She won’t die. She’s just having a bad time. The initial labour is usually protracted. She’s only having a bad time. Afterward we’d say what a bad time, and Catherine would say it wasn’t really so bad. But what if she should die? She can’t die. Yes, but what if she should die? She can’t, I tell you. Don’t be a fool. It’s just a bad time. It’s just nature giving her hell. It’s only the first labour, which is almost always protracted. Yes, but what if she should die? She can’t die. Why would she die? What reason is there for her to die? There’s just a child that has

to be born, the by-product of good nights in Milan. It makes trouble and is born and then you look after it and get fond of it maybe. But what if she should die? She won't die. But what if she should die? She won't. She's all right. But what if she should die? She can't die. But what if she should die? Hey, what, about that? What if she should die? (A Farewell to Arms Ch. XLI)

出産というものがはらむ生命の危険性が、彼の心に不安をよび起す。その不安を払い除ける術もなく、ただ‘What if she should die?’が波のように、彼の心に押寄せ又押寄せる。それがそのまま、彼の文のリズムとなってあらわれている。

動物はたえず生命の危険に身をさらしている。自分の生命をまもるためには、他を殺さなければならない。殺しあいが動物の世界であり、斗争が動物の生活である。このように絶えず死の危険性に直面している動物に虚偽や打算や詭計の入りこむ余裕があろうか。ただ勇敢にたたかうこと、それが動物の世界に於ける倫理である。結果としてあらわれる勝敗は彼らのあずかり知るところではない。たたかうという過程に生命を賭けること、それが動物の生きがいである。ヘミングウェイは人間をあらゆる面で動物と同一視しているだけでなく、人間のあるべき姿を、勇敢にたたかう動物の姿に見出している。そういう意味での勇者は‘The Old Man and the Sea’の Santiago となってあらわれる。

彼は、敵なる大魚と如何にたたかったであろうか。

大魚は彼にとっては、愛と尊敬の対象である。人間のように知性によってあざむくことを知らず、ただ精一杯、命をかけて挑む大魚の姿に威厳をすら見出している彼である。しかし、そのような大魚を殺すことが漁夫である彼に運命づけられた仕事である。生きるということが魚とのたたかいを意味する彼にとっては、たとえ愛と尊敬の対象であろうとも、いささかの仮借もない。それを食うに値する人間は一人もいないと断じるほどの立派な相手であるから、それだけ余計に自分の生命をかけて殺す価値を見出すのである。「たたかい」が終

ると、勝者である Santiago が自分のしたことを slave work といい、人間の詭計の醜くさを恥かしくさえ感じている。苦斗の末に仕止めた大魚も鯨におそわれて、彼に残されたものが骨だけであったとしても、Santiago はやはり勇者であり、勝者である。

A man can be destroyed but not defeated.

この絶叫の中には、決して屈しない勇者の誇りが感ぜられる。

たえず生命の危険に直面しているが故に、生きるということが死との斗争を意味するとき、「たたかい」という過程の一瞬一瞬に生きていることをひしひしと感じとり、生命の危機感の中にあふれるような生命の躍動を感じる。ここにヘミングウェイの生きがいがある。

結果としての勝敗は問題ではなく、屈せずたたかう過程——生きようとする意志——が尊いのである。人間も、何かを求めつつ敗れても敗れても屈せずたたかう王者ライオンの如くありたい。——ヘミングウェイはライオンを夢みつつ、そんな風に考えているのかも知れない。